

茨木のり子の故郷／愛知県西尾市

開催した(する)

三つのイベント

今年11月中旬に、筆者は三つの茨木のり子に関係したイベントを主催した(する)。11月6日は、のり子の詩作を題材とした朗読と文芸から「日本語を味わう」と題した会、11月17日は『茨木のり子の献立帖』のメニューを防災食にして調理試食する「防災食を味わう」と題する体験イベント、そして11月23日はこの4年間恒例としてい

のり子六月の会(2007年結成と、西尾市で活動する「詩人茨木のり子の会」(2013年結成)の協力により行う。実は筆者は、鶴岡市の出身で茨木のり子の墓所である浄禅寺には数回伺った

西尾市で行われている顕彰活動

西尾市という記念の企画行事を、2015年12月12日から翌年2月21日まで開催している。当時の関係資料などについて、在館の司書の方と意見交換させて頂いた。当地に関するのり子の詩には『花の名』や『お休みごころ』があるが、ほかに筆者が重要であると思つているのが『対話』で、今回の日比谷での行事題名にも『対話』を掲げた。

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大学院工学研究科准教授(金属疲労専攻)。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画(すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。一般財団法人「エコミュージアムいすみ」代表。

る「茨木のり子2022秋対話」の行事である。前者は、長野県軽井沢町で、後者は東京の日比谷で行う。

愛知県西尾市は、南端が三河湾に面し製茶にも適しており「西尾の抹茶」と呼ばれる西尾茶が有名な

である。筆者が当地を訪ねたのは2018年5月13日、名古屋から名鉄を乗り継いで、吉良吉田駅に降りた。そこは小さな駅であったが、茨木のり子の実家の宮崎医院の最寄り駅である。駅前でタクシーに乗り、運転手に街を案内し

真参照)。こうした店舗デザインも外商を主力とするから出来ることである。

茨木のり子は、1926年6月12日に大阪で生まれ愛知県西尾市で高校まで通い、詩作活動を東京都内などで行い、2006年2月17日にクモ膜下出血で急逝し、山形県鶴岡市に眠っている。11月23日の行事は、東京の日比谷図書文化館で開催されるが、鶴岡市と西尾市をリモートつないだ3地点でのオンライン行事である。そのため、鶴岡市で活動する「茨木

たが、茨木のり子の実家の宮崎医院の最寄り駅である。駅前

「詩人茨木のり子の会」では、その名の通り茨木のり子を顕彰している。大嶋氏はそうしていない(写真は、店舗面積の大半がコミック本

茨木のり子は、詩作以外に唯一の絵本として『貝の子プチキュー』という絵本(山内ふじ江、図を著わしている。それは、海辺の貝の一生の物語で、最後には死を迎えるのであるが、ストーリーの構成には、故郷、西尾市の吉良海岸や吉田海岸をイメージしたに違いない。大人も子ども、夢見ることは必然であり、未来のことこそが、茨木のり子の詩情には溢れている。なお、西尾市の「詩人茨木のり子の会」と鶴岡の「茨木のり子六月の会」は、互いに相手の地を訪問し交流している。

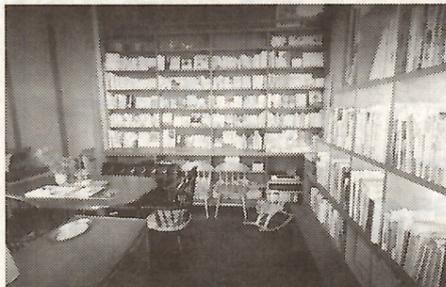
地元力発見!

佐藤建吉 「洗楓座」代表

③7 茨木のり子とふるさと



茨木のり子の故郷にある西尾市岩瀬文庫



街の本屋さんを超えた「まちの図書室」の鈴木書店

新聞